

昔むかし、ずっとむかし、あるところに、ひとりのお百姓が住んでいました。お百姓には息子が十二人ありました。上の十一人はかしこい子でしたが、十二人目は、お人好しのまぬけなヨーナスでした。

やがて、息子たちは成長して、仕事をさがしに出かけることになりました。親たちは、ヨーナスだけは、家に残るようにいいました。けれども、ヨーナスは、どうしても行くといはって、兄さんたちについて行きました。

十二人は出発し、やがて分かれ道にやってきました。兄さんたちは右の道を行こうといいましたが、ヨーナスは、左に行こうといつて聞きません。そこで、みんなは、しかたなく左の道を進んで行きました。

しばらく行くと、大きな農場にやってきました。みんなはそこで働くことにしました。一年たつと、主人はお礼に、ひとりに一頭ずつ、好きな雌牛を連れて帰るようにいいました。兄さんたちははりっぱな雌牛を選びましたが、ヨーナスは、やせこけて今にも死にそうな雌牛を選びました。

家に帰ると、お父さんが、ヨーナスの雌牛を見て、
「どうしてこんなひどいのをもらって来たんだ」といいました。兄さんたちは、大笑いしました。けれどもお母さんは、

「おだまり。ヨーナスの雌牛が一番いいかもしれないよ」といいました。

夕方、お母さんは、牛小屋で雌牛の乳をしぼりました。兄さんたちの雌牛十一頭分の乳で、ちょうどおけがいっぱいになりました。そこで、ヨーナスの雌牛の乳をいれるのに、小さななべを取って来ました。すると、ヨーナスが、

「おけがひとつかふたついると思うよ」といいました。しばらくしてみると、ふたつのおけが、すぐに一杯になりました。みんなはおどろきましたが、ヨーナスは、ただ笑うだけでした。

しばらくして、兄弟たちは、また、あの大きな農場に働きに行きました。

一年たつと、主人は、ひとりに一頭ずつ、雄牛をくれました。兄さんたちははりっぱな雄牛を選びましたが、ヨーナスは、やせこけて今にも死にそうな雄牛を選びました。

みんなは、家に帰ると、雄牛で畑をたがやしました。兄さんたちがひとつねたがやすあいだに、ヨーナスは、ふたうねたがやしました。

それからしばらくして、兄弟たちは、また、大きな農場に働きに行きました。

一年たつと、主人は、こんどは、ひとりに一頭ずつ、馬をくれました。兄さんたちはすぐに、すばらしい馬を選びました。ヨーナスは、いくつもの馬小屋を見てまわったあげく、やせ細った馬と、古いくらを見つけました。兄さんたちは、ヨーナスをばかにして、さつさと馬をとばして帰って行きました。

あとに残されたヨーナスに、やせ馬がいました。

「ヨーナス、おまえはどんなふうに飛んで行きたいんだい。鳥のようにか、風のように

か、それとも星のようにか」

「鳥のように！」と、ヨーナスは答えました。

「じゃあ、どんな服がいい。銅の服か、銀の服か、金の服か」

「銅の服だ！」

たちまち、目の前に、銅のよろいがあらわれました。ヨーナスが、それを着て馬にまたがると、馬はいいました。

「もし兄さんたちに追いついたら、みんなをむちで一回ずつぶってやれ」

馬は、鳥が飛ぶように走りだしました。

たちまち、ヨーナスは兄さんたちに追いついて、走りぬげざまに、みんなをむちで一回ずつぶちました。それから、森をぬけた所で、よろいをぬいで、兄さんたちを待っていました。

やがて、兄さんたちがやって来ました。兄さんたちは、ヨーナスに、どうしてこんなに早く来られたのかと聞きました。ヨーナスは、

「森を横切って来たからさ」と答えました。兄さんたちは、

「じゃあ、銅のよろいを着た乗り手を見なかったか」と聞きました。

「いや、見なかったよ」

「おれたちは、そいつに、むちで一回ずつぶたれたんだ。あやうく首が飛ばされるところだった」

日が暮れたので、みんなは、そこに横になつて寝ることにしました。ところが、夜中になると、兄さんたちは、こっそり起きて、ヨーナスを置いてきぼりにして行っていました。

ヨーナスが気づいて起き上がると、馬はいいました。

「ヨーナス、おまえはどうやって飛んで行きたいんだい。鳥のようにか、風のようにか、それとも星のようにか」

「風のように！」と、ヨーナスは答えました。

「じゃあ、どんな服がいい。銅の服か、銀の服か、金の服か」

「銀の服だ！」

たちまち、目の前に、銀のよろいがあらわれました。

「もし兄さんたちに追いついたら、みんなを一回ずつなぐり、一番上の兄さんは二回なぐってやれ」

馬はそういつて、風のように走りだしました。

たちまち、ヨーナスは兄さんたちに追いついて、走りぬげざまに、みんなを一回ずつなぐり、一番上の兄さんを二回なぐりました。そして、次の森の中まで行くと、よろいをぬいで、兄さんたちを待っていました。

兄さんたちは、追いついてくると、どうしてこんなに早く来られたのかと聞きました。

「沼地を横切って来たからさ」

「じゃあ、銀のよろいを着た乗り手を見なかったか」

「いや、見なかったよ」

「おれたちは、そいつになぐられたんだ。もう少しで殺されるところだった」

みんなはまた横になりました。けれども、兄さんたちは、またまた、ヨーナスを置いてきぼりにして行ってしまうました。ヨーナスは、こんどは、ぐっすり眠りこんでしまいました。

「ヨーナス、起きろ」と馬がさげびました。「星のように飛んで行くぞ。でないと、兄さんたちに追いつけない」

ヨーナスはとび起きて金のよろいを身に着け、馬に飛び乗りました。

「兄さんたちに追いついたら、みんなを一回ずつなぐり、一番上の兄さんは、三回なぐってやれ」

馬は、流れ星のように走り出しました。

ヨーナスは、兄さんたちに追いついて、走りぬげざまに、みんなを一回ずつなぐり、一番上の兄さんを三回なぐりました。そして、そのまま家に帰りました。

やがて、兄さんたちは、手に入れた馬に乗って、結婚相手をさがしに行くことにしました。ヨーナスも後から付いて行きました。

あるとき、野原を進んで行くと、ひとりのおばあさんに会いました。ヨーナスは、

「あんたのところに、娘が十二人いないかい。結婚相手をさがしてるんだ」といいました。

おばあさんは、

「ああ、娘が十二人いるよ。うちにおいで」といって、家に案内してくれました。

兄さんたちはみんな、おばあさんの家に入りましたが、ヨーナスだけは外に残りました。馬がヨーナスにささやきました。

「ばあさんは、おまえたちに食べ物を与えるだろう。そしたら、どの料理もひとさじめをテーブルの下にすてるんだ。それを拾ってポケットに入れたら、もう一度ここにおいで」

ヨーナスは家に入り、兄さんや十二人の娘たちといっしょにテーブルに着きました。そこへおばあさんが、おかゆを運んできました。ヨーナスはまっさきにスプーンを取って、最初のひとさじをテーブルの下にすてました。すると、床に落ちたおかゆは石に変わりました。ヨーナスは、かがみこんでその石をポケットにつっこみました。

次におばあさんは、キャベツ料理を運んできました。ヨーナスは、また、最初のひとさじをテーブルの下にすてました。すると、キャベツからとげが出て来ました。ヨーナスは、そのとげを、ポケットにつっこみました。

それから、おばあさんは、ミルクを運んできました。ヨーナスは、最初のひとさじをすてました。すると、こぼれたミルクに小さなあわができました。ヨーナスは、そのあわもポケットに入れました。

ヨーナスが馬の所にもどって来ると、馬はいいました。

「ポケットに集めたものを大事に持っているんだ。あのおばあさんは魔女だ。今晚、ベッドに入っても眠ってはいけない。みんなが寝てしまったら、娘たちの首からスカーフを

外して、おまえと兄さんたちの首に巻き付けろ。そして、おまえと兄さんたちの帽子を娘たちにかぶせるんだ。夜中に魔女がやって来て、帽子をかぶっている頭をナイフで切り落とすだろう。そして、ナイフを壁板の後ろにかくして出て行くだろう。そしたらおまえは、ナイフを引っぱり出して三つに折り、まどから捨ててしまえ。そして、兄さんたちを起こして逃げるようにいうんだ。おまえはおれの所に走って来たら、魔女を起こせ」

ヨーナスは、馬にいわれたとおり、ベッドに入るとみんなが眠るまで目を覚ましていました。そして、娘たちの首からスカーフを外して自分と兄さんたちの首に巻き付け、自分たちの帽子を娘たちの頭にかぶせました。

夜中になると、魔女がやって来て、帽子をかぶっている頭をナイフで切り落とししました。それから、ナイフを壁板の後ろにかくして出て行きました。ヨーナスは、すぐさま兄さんたちを起こして、逃げるようにいました。それから、ナイフを引っぱり出して三つに折り、まどから捨てると、馬の所に走って行きました。ヨーナスは、馬に飛び乗って、

「おうい、ばあさん。あんたはだれの頭を落としたんだ」とさげびました。魔女は気がついて、追いかけて来ました。

ヨーナスは、兄さんたちに、

「もつと速く走れ。魔女がすぐ近くにいます」といいました。

兄さんたちは走りに走りました。けれども、風がザワザワと鳴って魔女がやって来る音が聞こえました。ヨーナスは、ポケットから石を取りだして後ろに投げました。たちまち、魔女の前に巨大な山が現れました。魔女は家にもどって鋤を取って来て山をほりくずしました。

やがて、風がザワザワ鳴る音と、魔女の口笛が聞こえて来ました。ヨーナスは、とげを取りだして、後ろに投げました。すると、巨大ないばらの森ができました。魔女は家にもどって、おのを取って来て道を切り開きました。

じきに、激しい雨のほえる音と大地がゆれる音が聞こえました。魔女はもうすぐそこです。ヨーナスは、あわを取りだして投げました。たちまち、巨大な湖ができました。

魔女は、

「うまく逃げやがったな」とさげびました。

みんなは無事家にたどり着きました。

何日かすると、馬がヨーナスに、もう一度魔女の家に行くようにといました。ヨーナスは、再び馬に乗って、こんどはひとりで出かけて行きました。まどからのぞくと、魔女はぐっすり眠っていました。

馬がヨーナスにいました。

「魔女のまぐらの下からナイフをぬきだし、折って捨ててしまえ。それから、魔女のふところからかぎを取って、地下の墓場の扉を開けるんだ。墓場には金の髪の王女がいるから、連れ出しておいで」

ヨーナスは、魔女の部屋にしのびこみました。そして、ナイフを見つけて、折って捨てました。それから、魔女の手を持ち上げて、ふところからかぎを取りだしました。そのとき、魔女が、うんとのびをしました。でも、目は覚ましませんでした。ヨーナスは、地下の墓場の扉を開けて入って行きました。そこに、美しい金髪の王女がいました。

ヨーナスが王女を連れてもどつて来ると、馬がいました。

「さあ、星になって飛んで行こう」

ヨーナスと王女は馬に飛び乗りました。

魔女は、目を覚まして起きあがりました。ナイフがありません。ふところのかぎも見つかりません。地下の墓場に行ってみると、王女がいなくなっていました。

魔女は、ほうきをにぎって、ものすごい速さでヨーナスを追いかけてきました。あと一息で追い付きそうになったとき、ヨーナスは、王女のくしを後ろへ投げました。くしはどうしたって通りぬけられないようないばらの森になりました。

魔女は、おのを取りにもどり、道を開いてまた追いかけて来ました。あと一息というとき、ヨーナスは、王女のブラシを投げました。ブラシは、巨大な森になりました。魔女はおので道を切り開いて、また追いかけて来ました。あと一息というとき、ヨーナスは、王女のタオルを投げました。タオルは広い川になりました。魔女は、川を飲み干そうと、水を飲みはじめました。どんどん飲んでいううちに、魔女は、お腹がはじけて、死んでしまいました。

王女は、ヨーナスにいました。

「魔女の家にもどってください。あの家は、まほうにかけられたわたしのお城なのです。あなたは、まほうをとってくださいさなくてはなりません」

ヨーナスと王女が魔女の家にもどると、馬がいました。

「魔女の部屋の壁に木くずが十二個さしてあるから、それを取って、墓場に行くんだ。そして、まんなかのお墓の前に立ち、てのひらに木くずを乗せて、ひとつずつ燃やすんだ。熱くても決して木くずを手から落としてはいけない。ぜんぶ燃やしたら、何もかも、うまくいくから」

ヨーナスは、魔女の部屋の壁から十二個の木くずを抜いて、墓場に入って行きました。そして、まんなかのお墓の前に立ちつて、てのひらに木くずをひとつ乗せて燃やしました。すると、どよめきと、ざわざわいう声がしました。木くずを燃やすたびに、声は大きくなり、お墓も大きく高くなっていきました。最後の木くずを燃やしたとき、火が高く飛びあがり、ヨーナスは、気を失ってしまいました。

気がつくと、ヨーナスは、美しい部屋で寝ていました。起き上がると、まわりには大勢の大臣たちや召使いがいました。そこへ、王女が、王の冠と服を持って入って来ました。

「愛するヨーナス。あなたのおかげで、まほうはとけました。これからは、あなたがこのお城の王さまです」

ヨーナスと王女は結婚し、両親と兄さんたちも呼びよせて、みんな幸せに暮らしまし

た。

わたしも、お城の宴会に行つて、はちみつ酒とビールを飲んだよ。でも、みんなひげを伝つて流れてしまつて、口には入らなかつたのさ。

原話…『世界の民話33 リトアニア』鬼頭恵美子訳／ぎょうせい

再話…村上郁